資料　1

釧根地域将来像検討委員会　第２回委員会　論点整理

■目標とする将来像について

○将来像のとらえ方

・将来像は「現在」の延長線上ではなく、全く新しい価値観や住まい方を中心に考えるべきである。（田村委員）

・地域住民にとって、10年後、20年後にとてもわくわくして非常に素晴らしく、継続的に住みたいと思える地域になることが一番重要である。（近藤委員）

・地域のモチベーションを高める意味でも、他地域とは違う、特異性のある素晴らしい地域になるような「将来像」であるべきだ。（近藤委員）

・この地域でしかできないものをみつけ、他には真似できないことをやっていくべきである。（栗林委員）

・自然を大事にしながら、この地域の独特の文化をつくるという視点が必要であり、その「文化」を付加価値につなげるべきである。（石橋委員）

・道内６圏域の中での、釧路・根室は札幌に依存する度合いが低いなど釧路・根室の特異性、位置づけを明確にし、地域の風土や文化などをもっと活用し、特にこの地域にしか出来ない「独自性」を打ち出すべきである。(田村委員)

⇨ ○継続的に住みたいと思える地域づくりが必要
○地域の独自性を出した「将来像」を描くべき

○地域社会のあり方

・（常呂町のホタテ養殖のように）将来を見据えて、地域にある「題材」で今から出来ることに取り組んでいくことが必要である。（宮田委員）

・地域の中の「多様性」確保もキーワードになることから、代表的な海と山、酪農だけでなく、製造や情報、金融なども含めて考えると、釧路が担うべき役割は大きい。（田村委員）

・農協がもっている資金力の活用など行政と一緒になって地域づくりに積極的に関わりを持つべきである。（石橋委員）

・地域の人口の重心が圏域の南にあり、非常に偏った条件にあるため、社会基盤整備の際には、広域的な視点で整備をすべきである。（大島委員）

・地形条件などから釧路・根室圏の地域特性を一つのものとして考えた場合と、その中でそれぞれの市町村が連携して地域運営をするという発想を使い分けていくべきである。（石橋委員）

・地域にある豊富な資源を結びつけるためには、道路網などの小さなまとまりで漁業や農業、観光とを結びつけるスポットを集積させるなどを考える必要がある。（出村委員）

・域外、域内市場のバランスが取れた産業活性化方策の中で、新しい力のある産業をより強くしていく、その中心に食産業や観光産業などを位置づけながら、将来像に向けてのシナリオやスキームづくりをすべきである。（小磯委員長）

⇨
○釧路を中心とした「役割分担」と「連携」の構築が必要
○食産業と観光産業を中心にした複合的なシナリオづくりが必要

■安心・安全で質の高い食産業の構築について

○他産業との連携による高付加価値化

・水産資源を医薬品や健康食品に応用するなど、他産業との連携で大きな産業に育つ余地は十分にあることから、付加価値を高めるための仕組み、組織づくりが必要である。（大島委員）

・他地域にない高品質で安全なものを追求するなど、農業や漁業において地元で徹底的に高付加価値化にチャレンジすべきである。（宮田委員）

・森林と接合した海（の産物）・有機農業の推進・バイオ技術を多用したリサイクルシステム（土壌改良）の構築を図るべきである。（行木委員）

・山林の分収育有のような消費者と直結した一次産品の生産や管理生産現場の体験ツアー、産直の日常化（季節による産物の変化に広域連携で対応、産物の多様化）などを図るべきである。（行木委員）

⇨
○他地域にはない地域性を活かした食産業の構築が必要
○安全性の追求や他産業との連携などによる高付加価値化の推進が必要
○地域ブランド力の向上が必要

■自然環境と共生し、地域産業と連携した観光産業の振興について

○観光産業の役割強化

・地域の自立は収支のバランスにあるが、公共投資や補助金などでバランスをとる

ことが難しくなるため、移出産業としての観光産業の役割が高くなる。（小磯委員長）

・観光は地元資源を使って成立させることが重要で、自然環境資源を有効に活用しながら食産業との連携がこの地域では可能なことから、その中でのインフラ整備のあり方を検討すべきである。（小磯委員長）

⇨ ○移出産業としての観光産業の役割強化が必要
○地域独自の資源による観光産業の推進が必要

○新たな観光の提案

・この地域は、アニマルウェルフェアなど様々なツーリズムが可能であることから、他の（観光に関する）活動との結びつけなども必要である。（出村委員）

・休日のつくり方、過ごし方、楽しみ方を提案していくべきである。（石橋委員）

・海外などの「観光のまち」として成功している事例などを参考にしながら、もっとリピーターを増やす方向で考えていくべきである。（大島委員）

・利用者のマナーやゴミ管理といった視点から、カヌー客を対象とした「道の駅」ならぬ「川の駅」の指定を行うべきである。（行木委員）

・画一的なガードレール・防雪柵に変えて、全部防雪林帯にすると道路の表情が出て、観光資源としても地域の大きな特色ができる。（辻中委員）

・知床に行くと道路から知床旅情が流れるなど、「遊び心」を取り入れるべきである。（栗林委員）

・ただ単に自然をみせるのではなく、色々な技術を使って自然らしさをみせる、演出するなどして、自然と共生すべきである。（栗林委員）

・地域住民による「お勧めポイント」などの情報提供や、観光客が「ここは良かった」と体感した魅力調査の定期的な実施・公表を行うべきである。（行木委員）

⇨ ○新たな観光の発掘や楽しみ方を提案していく必要
○自然を育て、活用するなど自然と共生した観光振興が必要
○地域と一体となった情報提供を図る必要

○観光の国際化の推進

・道東もロシアからみれば温暖な地域である。根室市のみならず広域でのロシアなど外国人観光客の誘致、滞在を推進すべきである。（行木委員）

・道路などに万国共通の記号を多用すべきであり、特に国道や観光地では、外国語表示が必要である。また、共通で明確な生活標識（病院、トイレ、商店、旅館、警察、銀行等を記号化したもの）があると良い。（行木委員）

・我々が海外に行って感じる「面白さ」を、この地域で東南アジアの人々に味わってもらうことができるようにすべきである。（田村委員）

⇨ ○観光の国際化の推進とユニバーサルデザイン化が必要

■「住みたくなる地域・生活環境の充実」について

○地域住民の視点による地域づくり

・地域住民にとっては、継続的に住みたいと思えるような地域になることが一番重要である。（再掲：近藤委員）

⇨ ○「継続的に住みたい」と思えるような地域づくりが必要

■「東アジアなどとの関係の強化」について

・我々が海外に行って感じる「面白さ」を、この地域で東南アジアの人々に味わってもらうことができるようにすべきである。（再掲：田村委員）

・移住した外国人による異国料理店の開店、外国語教室の開設、新たな食材メニューの提供など「異文化体験できる道東」を形成すべきである。（行木委員）

⇨ ○物流に加え、観光など人的交流の促進
○ユニバーサルデザインなどの地域ホスピタリティの醸成が必要

■「将来像を支える仕組みづくり」について

○新たな産業の創出

・地域の優れた企業やビジネス経験の豊かなシニアなどの力を借りて、マーケティングや販路拡大、あるいは商品の高付加価値化ができるようにクラスターを戦略的につくっていくべきである。（宮田委員）

・地域の特色ある技術、ノウハウなどをインフラ整備に活用することによって、域内に新しい付加価値を作る企業を育成すべきである。（宮田委員）

・地震や津波などの災害を逆手にとり、各専門分野の一流の研究所、国際的機関等を設置すべきである。また、寒冷地ならではの研究（寒冷エネルギーの有効利用、

流氷発電）の推進、研究所の設置が必要である。（行木委員）

○情報システムの確保

・医療分野で見られるような、あらゆる地域からアクセスできる生活資源の共有（情報公開）化が望ましい。また、図書館や教育機関（特に大学）等も行政区域を越えて情報を伝えたり、講座を開催するなどすべきである。（行木委員）

○社会資本のあり方

・時間が経つごとにその価値が高まっていくような道路づくりが必要である。道路は経済の大きな動脈であるが、それと同時に文化の道でもある。（辻中委員）

・知床に行くと道路から知床旅情が流れるなど、「遊び心」を取り入れるべきである。（再掲：栗林委員）

・画一的なガードレール・防雪柵に変えて、全部防雪林帯にすると道路の表情が出て、観光資源としても地域の大きな特色ができる。（再掲：辻中委員）

・地域特有の社会基盤投資を行うためには、住民の満足度を評価するシステムが必要である。（大島委員）

・観光は地元資源を使って成立させることが重要で、自然環境資源を有効に活用しながら食産業との連携がこの地域では可能なことから、その中でのインフラ整備のあり方を検討すべきである。（再掲：小磯委員長）

⇨

○地域の人的資源や技術の利活用による新たな産業の創出が必要
○広域的な情報共有化の実現を図るべき
○地域特性を引き出す社会資本とすべき